

小松満の
コラム
ひとり言

第17回

令和の米騒動—農林水産省の失敗

理事長 小松 満

1993年は全国的に冷夏となりました。特に東北地方では日照時間が不足し、コメの生育が悪化し戦後最悪の凶作になりました。消費者はコメがなくなるとの不安から買いだめに走り店頭からコメが消えました。1974年のオイルショックに際しスーパーからトイレットペーパーが姿を消した時と同じでした。平成の米騒動です。

当時タイ米を輸入しましたが評判は極めて悪いものでした。

昨年夏頃急にコメがスーパーから消えるという現象が起こりました。令和の米騒動の始まりです。

農林水産省は「24年産の新米が出れば解消する」と繰り返すだけで何も策を講じませんでした。

秋になって新米が出てもコメの価格は上昇を続け、マスコミは毎日スーパーの店頭にはコメがないことを報じ続けました。

農水省は状況を見誤りその後の対応も後手後手に回りました。

備蓄米とは、平成の米騒動を教訓に自然災害や冷害などで不作の年に備えて、100万トンのコメを政府が蓄えておくものです。1サイクルを5年として毎年20万トン余りを買い入れています。

政府備蓄米の放出を求める意見が出ても、農水省は「備蓄米の使用基準に該当しない」として耳を貸しませんでした。この危機的状況においても官僚特有の柔軟性の無さを見事に発揮しました。

ことしの三月になってようやく農水省は備蓄米の放出を始めました。しかし、時すでに遅しでした。

「火は燃え始めた段階で消さないと猛火となり手が付けられなくなる」また

「災いは小さいうちに除去するのが良い」と言われます。

まず3月に2回の一般競争入札で、毎年の買い入れ量の21万トンを競争入札で放出しました。90%以上をJA全農が落札しました。その後10万トン追加放出し、5月末には総計で31万トンになりました。しかし、一向にコメの値段は下がりません。

一回目の放出が遅すぎて少なすぎました。まず、ドカーンと大きく放出して消費者心理を改善しなければならなかったのです。小出しの逐次放出は効果を減じます。

筆者の勘繰りかもしれませんが、恐らく官僚は、コメはあるのに業者が値上がりを待つて貯め込んでいるのだと考えていたのではないのでしょうか。

専門家の意見ではどうやら2023年が暑すぎて生産量が少なかったことが大きな原因のようです。そこに南海トラフ地震臨時情報により買いだめが起り、訪日外国人の増加、コロナ禍の終息により外食需要が増加したことなども一因となったようです。



備蓄米が放出されても一向にコメの値段は上がりません。備蓄米は精米の問題や流通の問題、JA全農が90%以上を落札したことなどもあり、なかなかスーパーなどの小売店までは行き渡らないようです。コメを放出するだけでは解決しないようです。

5月18日農林水産相が「私はコメを買ったことがない」と発言したとのニュースが流れました。筆者も買ったことがないと一瞬思いましたが、その後「家の食品庫には売るほどある」と続けたことには唖然としました。彼は自民党の農水族の実力者とのことで楽観的な見通しばかり語ってきました。しかし全くコメの値段は上がりませんでした。国民の信頼を一举に失いました。最初は大臣を辞任しないと主張していましたが国民の怒りは収まらず結局更迭されました。馬鹿者としか言いようがありません。

後任に小泉進次郎氏が農林水産相になりました。筆者は正直彼をあまり評価してはおりません。しかし着任早々、備蓄米は30万トン直接小売業者に売りわたす、足りなければいくらでも出す。消費者マインドを変えることが第一だと言いました。これは筆者の考えと一致します。マスコミは、備蓄米を放出した後に飢饉になったらどうするのだ、国民の財産を安売りしていいのか、透明性に欠けるのではないか、不公平になるのではないかなどと後ろ向きの発言を繰り返しています。

そして馬鹿者はもう一人いました。昨年から人気を得てきた政党の党首が2021年産の古古古米を「エサ米」と言ったのです。確かに来年まで残れば飼料になるのでしょうか。しかし今は古古古米を買わざるを得ない人もいますでしょう。国民を愚弄するのもいい加減にしてほしいものです。

決してこれだけで全体の価格が下がって安定化するとは思いませんがそのくらいの勢いでやらなければ解決しません。

筆者は以前から農家のトラクターなどの設備投資や肥料の値上がりさらには厳しい作業などからみてコメの価格は安すぎると思っています。今回の備蓄米の放出をめぐってはいろいろな問題点があることが分かりました。

まだ減反政策は続いているようです。本当にコメが不足したときのことを考えて今から今回の備蓄米放出で得た教訓を生かしてもらいたいものです。

若者が喜んで農業に従事できるような国にすべく減反の見直しをはじめ抜本的な農政改革をしなければなりません。

今日5月29日に随意契約による備蓄米が大手小売り業者に引き渡されました。ネット通販では瞬く間に売りきれたという事です。

このアップル通信の発行は7月の予定です。それまでコメの価格が落ち着くことを期待しています。



当院で行っている足の手術について

医師 小松 史

今回は、当院で多く行っている足の手術について、患者さんにもわかりやすくご紹介します。ここで取り上げていない病気についても、必要に応じて手術を含めた治療を行っていますので、お気軽にご相談ください。

外反母趾（がいはんぼし）



〈どんな病気？〉

ハイヒールなどつま先に負担がかかる靴を長年履き続けたり、加齢により足の筋肉や靭帯がゆるんだりすると、足の親指（母趾）が変形して突き出てくる病気です。軽度であれば、足底板などの装具で痛みがやわらぐこともありますが、強い痛みや変形が重度の場合は手術が必要です。

〈手術の方法〉

母趾の出っ張った部分の近くで骨を切り、第2趾の方へ押し込むように矯正し、金属製のワイヤーやスクリューで固定します。矯正が足りない時にはさらにつま先の骨切りを追加します。変形がより強い場合には母趾の関節を固定して矯正することもあります。

足関節の靭帯断裂（ねんざ）



〈どんな病気？〉

いわゆる「足首のねんざ」です。軽いねんざは自然に治ることもありますが、重度のねんざを放置すると足首がぐらついたままになり、ねんざを繰り返すうちに関節の軟骨がすり減って「変形性関節症」へ進行することもあります。

〈手術の方法〉

足首に小さな切開を入れて内視鏡で状態を確認し、緩んだ靭帯を骨に固定し直します。必要があれば人工靭帯で補強することもあります。

変形性足関節症（へんけいせいそくかんせつしょう）

〈どんな病気？〉

足首の関節の軟骨がすり減り、痛みや腫れが生じる病気です。加齢や過去の骨折、ねんざによる足関節の不安定さが原因になることがあります。

〈治療と手術〉

初期はサポーターやインソール（中敷き）で対応しますが、進行した場合は手術が必要です。軟骨のすり減りが部分的であれば、骨を切って足の形を整える「骨切り術」を行い、荷重のバランスを変えて痛みを軽くします。軟骨が広くすり減っている場合は、金属製のスクリューで関節を固定することで痛みを抑えます。

アキレス腱断裂



〈どんな病気？〉

ふくらはぎの筋肉とかかとの骨をつなぐ「アキレス腱」が切れてしまうケガです。ジャンプやランニングなど、急な動作のときに切れやすく、30歳以降はアキレス腱の強度が弱くなるため注意が必要です。

〈治療法〉

保存療法（手術をせずギプスや装具で固定）と手術療法があります。

保存療法では自然にくっつきませんが、治癒するまで約2か月の間、ギプスや装具で固定する必要があります。そのため、筋力が低下したり、また若干再断裂が多いと言われています。

手術ではしっかりと縫合することで、早期の復帰が期待できますが、アキレス腱部分の皮膚は薄く、傷が治りにくかったり、感染したりするリスクもあります。

どちらを選んでも1年後の治療成績に差はないとされています。

—手術後の経過について—

足の手術では、すぐに歩けるようになるわけではなく、「術後の生活」も治療の一部です。正しいリハビリが、回復のカギを握ります。

病名	歩行開始の目安	補足
外反母趾	術後1週から踵荷重で歩行可	足全体での歩行は約2か月後
靭帯断裂	術後1週からサポーターで歩行可	
変形性関節症	術後2か月ごろから歩行可	術後1か月からはギプス固定で歩行可
アキレス腱断裂	術後1週からリハビリ開始	つま先が上に向けられるようになると歩行可

すべてにおいて『歩き始めるタイミング』と『足にかかる負担を少しずつ調整すること』がとても大切です。焦らず、段階を追って回復を目指すことで、治療の成果がしっかりとあらわれます。治療を成功させるには、患者さんご自身が“自分の体を守る意識”を持つことも大切なのです。

お気軽にご相談
ください！



—通所リハビリテーションすだちより—



19年間ありがとうございました

介護士 小室 翔

この度、令和7年8月末日をもちまして、通所リハビリテーションすだちはサービスの提供を終了することとなりました。

平成18年5月15日にリハビリテーション・介護を必要とされる地域の高齢者の方々を支える施設として開設し、19年間にわたり地域の皆様にご愛顧いただきました。

延べ241名の方に利用していただき、一番長く利用している方は平成18年12月から利用されており、50代の方から最高齢は101歳とリハビリテーションを通し沢山の方に利用していただきました。

私がすだちに勤務するようになり10年経ちます。最初の頃は1日の利用者数が10人前後と寂しいときもありました。スタッフ一丸となり利用者増加のため様々な活動をして徐々に利用者数が増加し、全曜日が定員20名に達したときはスタッフ全員で喜びました。2019年に新型コロナウイルスが流行し、コロナ禍となり利用者数が減少した時期もありますが、ここ1~2年は全曜日が定員一杯となり、毎日すだちに来るのが楽しみととても賑わいアットホームな雰囲気の中、充実し楽しく仕事をさせていただくことができました。

この度、諸般の事情によりサービスの提供を終了することとなりますが、今まで通所リハビリテーションすだちに携わっていただいたご利用者様やご家族様、ケアマネジャー様に感謝を申し上げるとともに、一緒に働いてきたスタッフ、10年間働かせていただいた病院に感謝したいと思います。

本当に10年間ありがとうございました。利用者一人ひとりの笑顔を忘れずに、今後につなげていきたいと思えます。

